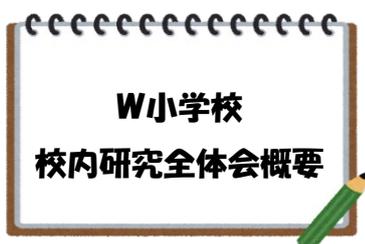


校内研究活性化プロジェクト研究通信

第11号 令和5年(2023年)11月7日発行

秋が深まり、夜の寒さが強まってきました。プロ研通信第11号では、10月18日(水)に開催されましたW小学校の校内研究会の様子をお伝えします。

授業者のA先生と研修推進委員および高学年部の先生方は、夏季休業期間からこの日までに、複数回の指導案検討会や事前授業を通して学びを進めてこられました。そんな学びの詰まった研究授業を通して、参観者の先生方が校内研究を自分事と捉えて学びを進めておられる様子をお伝えします。



W小学校 研究主題

自ら考え、表現できる子どもの育成をめざして
～日常生活と算数をつなぐ授業展開の工夫～

注目ポイント

- ・授業検討会を通じたA先生(授業者)の学び
- ・教員一人ひとりが自分事と捉える校内研究

第1回指導案検討会

8月17日(木)、夏季休業中に今回の研究授業に向けての第1回指導案検討会が行われました。参加者は、高学年部(5・6年生の学級担任と特別支援学級の担任)の先生方、5名でした。

W小学校の研究の窓口となる教科は算数科であり、研究の副題に書かれている通り「日常生活と算数をつなぐ」ことを通した子どもの育成を大切にされています。そのことを踏まえ、授業者のA先生が提案されたのは、第6学年算数科「およその面積や体積」の授業でした。日常生活において、私たちが概数を多くの場面で使っていることを考えると、単元を通して子どもたちの生活と算数科の学習をつなげることができそうです。

指導案検討会が始まると、A先生は以下の3点の検討事項を挙げられました。

- ①「大昔に地球の裏側に巨大な隕石が衝突し、その衝撃で琵琶湖が飛び出したことでできた島が淡路島である」という「琵琶湖と淡路島の伝説」を検証する課題の設定は子どもの主体性を引き出すものになっているか。
- ②1時間の授業の中で琵琶湖と淡路島、両方のおよその面積を求める授業展開にすると時間が足りなくなるのではないか。
- ③琵琶湖と淡路島の「およその面積」を求め、その後どのように授業を締めくくればよいか。



琵琶湖と淡路島

指導案検討会の中で出された意見を3点の検討内容に照らして整理しました。

①課題について

- ・全国学力・学習状況調査の児童質問紙の結果、「(51)算数の勉強は好きだ」の項目はポイントが低かったが、「(52)算数の勉強は大切だ」の項目はポイントが高かった。子どもたちにとって、算数科の学習は好きではないが大切だと思える学習だ。だからこそ、子どもたちがやってみたくと思える課題は大切だと思う。
- ・「伝説」というキーワードもあり、子どもたちの興味・関心を引くことはできそうだ。



第1回指導案検討会の様子

②授業展開と時間配分について

- ・琵琶湖のおよその面積を全員で求めることで求め方を身に付け、淡路島のおよその面積は適応問題として出題してはどうか。
- ・1時間目はおよその面積の求め方に重点を置き、2時間目で伝説の検証問題に取り組んではどうか。
- ・一人で二つの面積を求める必要はないのではないか。
- ・計算でつまづきを減らすことと時間短縮のために電卓を用意してはどうか。

③授業の締めくくり方について

- ・子どもたちに付けたい力を明確にする必要がある。これまでの学習を生かしておよその面積を求めることが目標であり、伝説の真偽を確かめることが目標ではない。
- ・本時のまとめを「およその面積を求めるためには～」のようにしたいから、そうなるように授業を組み立てていく必要がある。

その他

- ・およその面積の有用性を子どもたちが気付けるようにしたい。
- ・他社の教科書も参考にして課題を検討してみてもどうか。

子どもたちが主体的に学習に取り組むことができるように考えられた指導案を学年部の先生方が様々な視点から検討されていました。その様子から、A先生の個別最適な学びを支える協働的な学びの場は、他の先生方の個別最適な学びの場にもなっていると感じました！



研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥

事前授業と事後検討会

10月12日(木)に研究授業に向けての事前授業と事後検討会が、高学年部の先生方に加え、研修推進委員の先生方の9名で行われました。事前授業は授業者が担任を務める学級とは異なる学級で行われました。事後検討会では、授業中の子どもの学びの姿から協議を進めることができるように授業のビデオが用意され、机には子どもたちがグループ活動で用いたワークシートとホワイトボードが準備されていました。



事前授業後の検討会の様子

以下、検討されたことの一部を授業の場面ごとに整理しました。

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">導入</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「琵琶湖と淡路島の伝説」の導入はよかった！子どもたちの思考がスムーズに本時の課題に向かった。スクリーンではなく、大型モニターで提示すればさらによいと思う。 ・このやり取り(下枠内)から「およそ」の考え方につなげていくことができればよかった。子どものつづやきを拾い、広げることができれば本時のねらいにつながった。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>T : 琵琶湖と淡路島の面積求められる？ C1 : 求められへんやん！ T : どうして？ C1 : だって線がぐにゃぐにゃやもん。 C2 : (小声で)四角形に置き換えたらええんちゃう？</p> </div>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">自力解決に入るまで</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが、問題を自力で解決するための道筋を十分にもてないまま自力解決の時間に入ってしまった。その結果、子どもたちの手が止まった。自力解決の時間に入るまでにもう一段階ステップが必要だ。 →子どもたちから出てきた求め方を板書に残せばよかったのではないかな。 板書を手掛かりに自力解決に向かえた子もきっといるはず。 ・教師がどこまで自力解決に向けてのヒントを与えるべきなのかわからない。 →求め方のヒントは子どもたちから出せるようにしたい。
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">自力解決</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・琵琶湖と淡路島のどちらか一方を自分で選択して面積を求めるのはよかったと思う。 ・1マス(縦5km、横5km)で25km²だということに気付いていない子が多かった(図1)。 ・子どもたちは、およその面積を求める場合でも土地を切り捨ててはいけなと考えていることが分かった。だから、大きく囲みすぎていた(図2)。 →非常に多くの子どもが迷っていた。 子どもたちと、目的に合わせて切り捨ててよいかを考えたい。 ・ヒントカードはあった方がいいが、全員に渡すのではなく困っている子に対して渡すものにしないと、思考の誘導になってしまう。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div data-bbox="895 1003 1362 1249"> </div> <div data-bbox="927 1261 1278 1290"> <p>図1 提示された課題(琵琶湖)</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center; margin-top: 20px;"> <div data-bbox="890 1339 1326 1576"> </div> <div data-bbox="927 1588 1278 1617"> <p>図2 琵琶湖を全て囲んだ考え方</p> </div> </div>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">グループ活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ作りにかかる時間を短縮できないか。 ・グループ活動の手順がわかるような工夫があるとよい。活動が停滞しているグループが見られた。 →大型モニターに活動手順を示しておくとい。
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">全体交流まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・最後に琵琶湖と淡路島の正確な面積を伝えることで、「およその面積」であっても、ある程度精度を高く求める必要があることに気付かせることができる。それが次時のめあてにつながらないか。

教師の学びを生かした研究

10月18日(水)5校時に、A先生が担任する学級で研究授業が行われました。

検討を重ね、学んでこられたことを生かし、本時の授業でA先生が実践された内容は以下の通りです。



研究授業の様子

導入	<ul style="list-style-type: none"> ・「琵琶湖と淡路島の伝説」を、プレゼンテーションソフトを活用して大型モニターで提示 →短時間でわかりやすく学習活動を伝えることができた。
自力解決に入るまで	<ul style="list-style-type: none"> ・「およその面積」の求め方の整理 →「マス目を数える」「三角形に見立てて求める」など、子どもの発言から自力解決の手立てをまとめる。 →自力解決のヒントをカード化して黒板に貼り付ける。 ・一マスの面積が25km^2であることの確認
自力解決	<ul style="list-style-type: none"> ・電卓の使用 →全員が使える数の電卓を用意しておき、子どもが必要に応じて取りに来る。 ・ヒントカードの配付 →求積の公式をカードにして、公式でつまづいている子どもに配付する。
グループ活動	<ul style="list-style-type: none"> ・グループづくり →自力解決の進み具合や方法などからグループを作る。 ・大型モニターの活用 →グループ活動の進め方の例を示す。
まとめ全体交流	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の締めくくり →子どもたちが求めた「およその面積」と正確な面積を比べ、誤差が少ない求め方について考える時間を取る。

夏季休業中に構想された授業を、たくさんの学びを生かして何度も再考してこられたことがとてもよく分かる授業でした。特に、教師主導の授業から、子どもたちが自分で選択する場面の多い、子ども主導の授業へ舵を切られたことは大きな変容だと思います。



研究協議会の様子

研究協議会は、先生方の授業改善に関する課題を基に「支援の仕方」「板書の工夫」「発問、声掛けの工夫」「交流が活発になる条件の設定や手立て」の四つのグループに分かれて行われました。

校内研究会の流れ

1. 授業者・学年より本授業に関わって
2. 質疑応答
3. グループ協議
4. 全体交流
5. 研究会の振り返り

協議のポイント

- ①研究主題を達成するために、本時の授業展開はどうであったか(御自身の課題にも触れながら)。
- ②授業者の課題に沿った視点から見て授業はどうだったか。

これまでのW小学校のグループ協議は、グループごとにテーマを分けるのではなく、全グループが校内研究主題に沿った協議をしていたようです。しかしそれではテーマが大きく、内容が漠然として終わってしまっていたようです。

そこで今回は、視点を絞り具体的に協議ができるよう、校内研究主任がY小学校で実施した第6回プロジェクト研究会での学びを生かし、似た課題意識をもつグループでの協議を設定されました。

グループ協議では「グループ協議メモ」(図3)を活用し、「①研究主題のための、授業展開はどうであったか(個人の課題にも触れながら)」「②授業者の課題についてどうだったか」の2点について協議が行われました。

授業者の課題
交流が活発になる条件の設定や手立て

時短

板書 準備 パワポ

グループ協議メモ

研究主題のための授業展開はどうであったか(個人の課題にも触れながら)

- **グループ分けして考える**
 - 普段からタイプが似た者同士の交流の時間を。
- **三角形のとりに方に迷う姿** (1人の発案から流れてきた)
 - ヒントを! 途中で底辺・高さ・縦横の線と確認。言葉で交流できる。比べられる。自力解決の道。
- **導入のやり取り** 子どもたちの不安とどうした!!
 - 周りを見る子たちからそこそこ提示! かせぎ!
 - 今まで習った形全て提示 → 安心して色を選べる!
 - 前で見聞を聞いておけること! 見方を工夫できた?
- **追いかけすぎる... 仕上げ多**
 - 授業者の課題についてどうだったか
 - **新しいグループ分けにチャレンジした!**
 - 活発な交流のためなら4月からくり返す。
 - 似たタイプの交流で1人1人自信をつけさせる!
 - 通し番号、色わけ にはおとすと使える
 - **仕上げの中にぬけポイントを!**
 - 子に信じて、考えを待つ時間を!!
 - 子とやり取り厳しければ先生も使う!!
 - **明日から活かそう!**
 - 他の方の意見を発表・とにかく話す! 立つ!
 - しゃべる・聞かせる・話すことの自信!
 - 子どもの皮をはがす。

● Good ポイント
● のびしろポイント
● アイデア・アドバイス

図3 研究協議で使用された「グループ協議メモ」

以下に、グループ協議の一部を紹介します。

※「交流が活発になる条件の設定や手立て」グループでの発言の内容を研究員が整理して作成

B先生：子どもたちから出された自力解決のヒントを、カード化して黒板に貼り付けることは有効だった。事前授業の時よりも子どもの手は止まらなかったし、ほとんどの子どもたちが求め方を図に示せていた。

C先生：しかし、それによって考え方が誘導されてしまったような印象も受けた。もう少し多様な考え方が見られてもよかったように思う。きっとそれが活発な交流につながると思う。

a児とb児は琵琶湖を三角形に見立てて面積を求めていた。それぞれが見立てた三角形の大きさは同じであったが、線を引いている場所が異なった。グループで一つの考えにまとめる時に、次のようなやり取りがされていた。

a児：私、bさんの考え方の方がいいと思う。
 b児：なんで?
 a児：三角形の大きさは一緒やけど、bさんの方が余白少ないもん。
 b児：そう言われればそんな気もするな。

このやり取りを聞いていて思ったのだが、子どもたち同士で「なぜ」を問うことが活発な交流につながるのかなと考えた。そのためには相手の話を聞いて、自分の考えと比べることも必要だと思う。

事前授業の時にも感じたことですが、W小学校の先生方は子どもの学びの姿から授業について語ることが当たり前になっています。その素地に、テーマを設定したグループ協議が加わることで、より具体的な学びの姿から協議が進められていました。



W小学校の先生へのインタビュー

今回は授業者のA先生と、本年度からW小学校に赴任されている先生の2名にインタビューをさせていただきました。

< A先生へのインタビュー >

< 質問① >

御自身の課題を具体的に教えてください。

子どもの学ぶ姿を具体的に想定して授業づくりをすることができていません。目の前にいる子どもたちに合った指導をしていかなくはないかと思っていますが、それがなかなかできていないというのが私にとっての大きな課題です。



A先生

< 質問② >

研究授業を通してどのような学びを得られましたか。

授業中は子どもを困らせたくなかったので、たくさん授業に向けて準備をしてきたつもりでした。しかし、それでも子どもの思考が止まってしまうことがありました。きっとそれは、子どもの思考と私の支援の差が生み出したもので、その差についてもっと考えて準備をしていけるとよいと思います。例えば、完全に手が止まっていた子やこちらが想定していなかった既習図形を描きはじめて子もいました。自力解決の時間を取るまでに、子どもたち全員が見通しをもって自力解決に臨めるように授業を展開すればよかったなと思っています。また、発問は自分自身の焦りから何度も問い直してしまっていたので、子どもたちに伝えたいことを精選していかなければいけないと思いました。

< 質問③ > 御自身の課題に向かって今後、どのように学びを進めていこうと考えていますか。

今回の研究授業では、グループ活動を活性化させたいと思い、子どもたちの考えを基にしたグループづくりに挑戦してみました。このグループづくりは初めて挑戦したこともあり、よかった点も改善点も含めて、算数科だけでなく他教科の授業でも生かしてよりよい手立てにしていきたいと思っています。

< 質問④ > 校内研究を自分事として取り組んでいますか。

過去にも研究授業をしたことはあるのですが、正直なところすごく嫌でした。研究授業を考え、「私は〇〇〇のようにしようと思っています」と伝えると、「いや、それは×××のようにした方がいいよ」と言われることがありますよね。これまでは、それが私を否定しているように感じていました。でも、今回の研究授業は楽しいと思えたことが多かったです。「こうやりたい」という思いがあり、それに賛同してくださる先生方がいたからです。試行錯誤しながら授業づくりを進め、隣の学級で事前授業をさせていただき、改善すべき点やよかった点を話し合いながら、次の手立てを考えることができたことがすごくよい経験になりました。

< D先生へのインタビュー >

< 質問① > 御自身の課題を具体的に教えてください。

板書の仕方、発問の仕方、授業の組み立て方など、いろいろ勉強したいと思っています。また、授業中に教師がどこまで支援をし、子どもたちに任せていくべきかの加減も難しいと感じています。

< 質問② >

研究授業を通してどのような学びを得られましたか。

新しいことにチャレンジすることは大事なことだなと思いました。幸せなことに、私の周りにおられる先生方はもったいぶらずに御自身の経験を教えてください。今日の協議の中ですと、「活発に交流するためには」ということとお話をさせていただきました。その中で「僕はこういうことをしているよ」とか「普段はこういうスタイルでやっている」ということをたくさん話していただきました。その中には、私がし



D先生

ていることに似ているものもありました。似ているのなら、さらによくしていくために取り入れやすいこともあるなと思いました。その人のまま真似することはできませんが、学んだことを自分のスタイルの中に取り込むことはできるのではないかと思います。

<質問③>本日の学びをどのように実践に生かそうと考えていますか。

すぐに生かせるなと思ったことは、友達の考えを他の子が発表するという手法です。この手法は以前に少しだけ取り組んだことがあったのですが、私はうまくいかずにすぐやめてしまいました。でも、今日どのように取り組んでおられるか聞くと、友達の考えをそのまま発表するのではなく、友達の考えを自分の言葉に置き換えて発表したり、その考えのよいと思ったところまで話すようにされたりしているとのことでした。これらの工夫を生かして、学級の子どもたちに合った手法を考え、もう一度やってみようと思います。

<質問④>校内研究を自分事として取り組んでいますか。

私は、校内研究を自分事として取り組んでいると思います。校内研究の括りがどこまでなのか曖昧なのですが、私にとっては毎日が学びの連続です。私が困って小さな声で呟いていることをW小学校の先生方は拾い上げて一緒に考えてくださいます。そして、やってみようという気持ちを受け止めてくださいます。だから、やってみようと素直に思えるのがとても楽しいです。子どもの変化が見えてくると、自分の方向性に自信をもてるし、楽しいなと思えます。チャレンジしたことが子どもの反応や変化として返ってくるのが、本当に楽しいです。

校内研究主任へのインタビュー

<質問①>

本日の研究会を振り返り、よかった点と改善していきたい点を教えてください。

よかった点は、グループ協議が思っていたよりも盛り上がったところです。今まで、校内研はどちらかというと面倒くさいとか手間がかかるとか重たいとか…そういう人が多くて、いざやってみても、盛り上がるけれども次につながらないことが多かったように思います。

また、私はこれまでのプロジェクト研究会の中で「新たな教師の学びの姿」について学びました。それぞれの教員が研究主題に沿って個人の課題をもち、みんなが同じことをするのではなく、それぞれの課題に沿った学びを進めていけばよいという考え方が自分の中ではインパクトが大きかったです。Y小学校でグループ協議をされていたのを見て、W小学校の学校規模は小さいけれど、これならできるなと思いました。今日は、教員一人ひとりがもつ課題意識から、協議の視点ごとにグループ分けをしたことがよかったのかなと思います。

ただ、改善するとすれば、「今日の授業について」や「これからの取組について」など、協議の時間を区切って話すことができる時間があれば、先生方がより「自分の学び」としていけるのかなと思いました。

今後の校内研究会でも、継続して今日と同じグループで協議をしてみようと思います。その中で、授業で取り組むことについて具体的な話ができるように研究主任としてコーディネートをしていけば、もう少し「校内研究って面白いな」とか、「校内研究で学んだことをやってみようかな」と思ってもらえるのではないのでしょうか。そうやって、校内研究が自分事になっていくのかなと思っています。校内研究会が、堅苦しい会でなく、「やってよかった」と思える会にしていきたいなという思いがあります。



校内研究主任

<質問②>授業者のA先生とD先生のインタビューを聞いて思ったことを教えてください。

自分よりも若手の先生、これから学校の中心となって活躍される先生方が前向きに校内研究を捉えてくださっていたのが、私にとっての安心材料になりました。そういう先生がおられるのであれば、これからも校内研究をやっていけると感じました。今日のことを振り返り、次の課題をもっておられるということで、校内研究を自分事として捉えておられるのだなと感じました。

<質問③>

W小学校の教員一人ひとりが、校内研究会を自分事として捉えて学ばれている要因は何だと考えられますか。

今までの校内研究会でも、協議をするということは同じなのですが、これまでは研究主題に迫る話合いという方向で協議をしていたので、内容が漠然としていました。テーマが大きすぎて話の方向性が定まらないまま話していて、まとまらないまま終わってしまうということがありました。だから、似た課題意識をもつ先生同士でグループをつくり、具体的な協議の視点を伝えることで協議がしやすくなり、自分の学びが実感できるのではないかと思います。

W小学校では、放課後に職員室で授業の話や子どもの話をする事が多いです。私から高学年部の中で積極的に話す機会をもったり、他学年部のところにも話しに行ったりして、職員室内でみんなが気楽に話し合える雰囲気をつくり出したいなと思っています。気楽に校内研究に取り組みましようということは常に伝えています。

また、研究授業の時に使っているサクスシート(図4)も要因の一つです。サクスシートは、授業者の課題に沿った視点で参観者に見取ったことを書いてもらうカードです。サクスシートでは、自分の苦手だと思っていたことを褒めてもらえることもあります。自分とは異なる視点から授業を見てもらえるのでよいヒントをもらえます。サクスシートを書く側も、授業の感想だけでなくたくさんの気づきを書くことができるようになってきました。そんなシートを渡すことで、授業者が「授業を提供してよかった」と获得感をもてるようにしたいと思っています。

サクスシート			
日時	令和5年	月	日() 校時
授業者	年	組	先生
授業者のリクエスト視点			
授業展開でよかったこと			
授業者のよさ、強み			
コメント			

図4 授業者に手渡される「サクスシート」

<質問④>

教員一人ひとりの学びを今後さらに促進するために校内研究としてできることは何だと思えますか。

今年度は、とにかく自分に成果が返ってくる校内研究にしたいという思いがあります。今日の協議は、先生方一人ひとりの実践に返るものになっていくと思うので今後も続けていきたいです。自分と似た課題をもっている先生と話すことで、困っていることを相談することもできるし、次の方向性を見つけることもできます。校内研究を通して学んだことを実際に次の実践につなげていくことは本当に大切だと思っています。授業をした人も、参観した人も「この前の校内研究で勉強したことを基にして、こんなふうにやってみました」ということが言えるといいなと思います。どのようその実践を共有していけるかまでは考え中なのですが、小規模校の強みの一つは、情報共有が早くできるということだと思いますし、現状のW小学校の雰囲気はそういうことがしやすいと思っています。それが実現することができれば今以上に自分事になっていくでしょうね。極端な話、「研究会はいらない。毎日やっているから」までなればすごいですよね。

W小学校の校内研究会の参観を終えて、研究員の思い

W小学校の先生方、今回は大変お世話になりました。ありがとうございました。

研究協議会のはじめに、校長先生から、「今回の授業は終わったが、校内研究は今日で終わりではない。研究協議での学びをこれからは生かしてほしい」というお話がありました。やはり、研修と実践の往還が大切なのだと改めて感じさせられました。

校内研究主任が、「新たな教師の学びの姿」をはじめ、校内研究を活性化させるための理論を学ばれ、実践に生かすために考え続けてきてくださった成果が明確に表れた校内研究会だったと感じました。まだまだこれから進化していくW小学校の校内研究から目が離せません！



研究員 いぬます けいご 稲益 圭吾



研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥